広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第41号　2013．3〉

家庭科教員養成課程における浴衣着装授業の構想力育成の課題

― 教科教育，教科内容及び教育実習担当者による学習指導案の評価を通して ―

デミール千代　　藤井　志保　　村上かおり　　鈴木　明子
今川　真治

１．はじめに

家庭科教員養成課程において，教科内容専門と教科教育専門をどのように位置づけて展開するかは，平成13年の「在り方懇」に至る長い議論の中で，またその後現在に至るまで常に重要な課題であった。それは，これまでに検討されてきた家庭科の教科構成原理（例えば「環境制御理論」など）の方向性と，教育職員免許法における「家庭」に関する科目の枠組みとの間の乖離にもみることができる。家庭科の教科内容は，家庭生活及び生活に関わる全ての事柄を含み，その背景学問は，人文，社会，自然分野及び複合領域の多岐にわたる。さらに，家庭科は，生活にかかわる知識や技術を個別に習得するに留まらず，それらの関係性やシステムを理解し，生活を創造する意欲と自立・自律した生活者としての実践的な態度育成を目指す教科である。家庭科における教科内容専門と教科教育専門の架橋は，このような「生活者育成」のための構造的な目標に照らして，広範な教科内容の体系化と多様な方法論的アプローチを前提として行う必要がある。

広島大学人間生活教育学講座において教員養成カリキュラムが目指す到達目標は次の通りである。「カリキュラム全体を通じて時代の変化に対応できる自立した生活者としての生き方や新しい家庭及び人間生活環境の創造に関する教育と実践をなし得る能力を身に付ける。」「そのために，家族を中心とした人間生活における人の行動を物的環境，精神的環境，身体的環境さらには社会的環境という様々な視点で考えさせる専門基礎科目及び専門科目を設け，自己研修能力に優れた中等学校教員としての能力を身に付ける。」(一部省略)これらの目標詳述には，今後の家庭科の方向性を踏まえた教科内容構成に関わる基礎的・基本的考え方が示されている。しかしながら，教科内容専門・教科教育専門を俯瞰したカリキュラムの再構造化は現在準備段階にあると言ってよい。担当者の人数及び専門性，時間，場所など学習環境の限界の問題もさることながら，このようなカリキュラムの具体的な見直しこそ早急に取り組まねばならない課題である。さらに家庭科教員養成カリキュラム改善への方向を見いだすためには，教育実習で育まれる教育実践力も併せて検討することが必要である[1)2)]。

以上のことから家庭科教員養成の質を向上させるために，家庭科教育学担当者，家庭科内容学担当者及び教育実践指導担当者（附属学校教員）がどのような形で協力，連携できるのか追究するための手がかりを得るために，三者の立場で養成課程の学生の授業構想力の課題を検討することを試みた。

平成24年度から実施された中学校新学習指導要領技術・家庭，家庭分野では，和服の基本的な着装を扱うことが家庭科学習の有効な手だてとなり得ることが述べられている。それらの内容については製作を通して学ぶことが効果的ではあるが，授業時間の制約が大きい。そのため浴衣の着装体験を通して学ぶ工夫がみられる。しかし洋装文化の定着により，教員自身も日常的に和服を着用する機会が少なく，また学習経験が減少したことによって教材化の手がかりを得ることが難しくなっていると考えられる[3)]。このような浴衣の着装を教材とした授業を構想する力を教員養成課程でどのように育成していけばよいのか，その教材に特化して課題を追究することは，家庭科カリキュラムに内在する問題を見いだすことにもつながる。

Chiyo Demille, Shiho Fujii, Kaori Murakami, Akiko Suzuki, Shinji Imakawa: Subjects for planning ability of home economics education classes by wearing Yukata in teacher training curriculum for home economics education －Through an assessment of teaching plans by each teachers of academic subjects, curriculum and teacher training－

本研究では，浴衣の製作実習を通じて平面構成の知識と技術を学んだ家庭科教員志望の大学生に，中学校家庭分野における浴衣の着装体験を取り入れた授業を学習指導案として構想させ，当該の家庭科内容学（被服学）担当者，家庭科教育学担当者及び教育実習担当者（附属三原中学校教員）が，各々の専門の立場からそれらの授業の評価を行うこと通して三者それぞれの教員養成へのかかわり方と担当授業や教育実習における指導の課題及び三者の連携の在り方を追究することを目的とした。

２．人間生活系コースにおける教員養成の現状

人間生活系コースの学生は，入学時に人間生活教育プログラムに登録され，卒業時に学士（教育）の称号を取得するためのカリキュラムを履修する。人間生活教育プログラムは，人間生活教育の原理，内容，方法について専門的な素養と教育実践力を有したうえで，理論と実践が融合した教育研究を行うことができる中学校・高等学校教員(家庭)の養成を目的としている。併せて，教育関係機関・施設等において人間生活教育に関連する業務に携わる専門の職員の養成も目指している。そのために，本プログラムでは，教育の基礎的な理論，中・高等学校各教科における内容，教科教育の領域を深く関連づけて学習し，中等教育に携わる上で必要な知識と技術を習得できるように工夫されている。

また本プログラムの到達目標として，次の３点をあげ，各セメスターの終了時にこれらの到達目標に対する学生一人一人の到達度を評価し，次のセメスターへの履修計画に役立てるよう指導を行っている。

（１）時代の変化に対応できる自立した生活者として，人間生活環境の創造に関する教育と実践をなし得る能力が身につく。

（２）そのために，家族を中心とした人間生活における人の行動を様々な視点で考えさせる専門科目を設け，自己研修能力に優れた指導的な中学校・高等学校の家庭科教員としての能力を身につける。

（３）家庭科教員養成と併行して，生活全般に関する内容の知識と素養を身につけ，企業や研究機関で活躍できる能力を獲得する。

これらの目標を達成できるよう学習できるカリキュラムを配置しているが，各領域間での連携についてはまだ模索中であり，検討課題を多く含んでいるのが現状である。また自立した生活者として，人間生活環境の創造に資する能力を身につけるためには，関連の知識や技能を活用できる機能的学力が必要であり，そのためのトレーニングが不足していことも課題である。

表１に，人間生活系コースにおける教員養成の流れを示した。教育実習関係科目は1セメスターから始まるため,教員になるという本コースの使命については,大学入学後早い時期に認識できる。また専門科目は２セメスターから配置し，教職に関する科目ならびに教科に関する科目はそれぞれセメスターが上がるにつれて，専門性が高くなるよう配列している。しかしながら６セメスターでの教育実習（本実習）までに教科に関する広範な内容の科目を履修し，修得することには難しさも伴う。また，生活を構造的，体系的に理解する科目を入学後早い時期に履修させる必要もある。

本研究の内容に関わる被服学においては，担当教員２名で８科目を担当している。いずれも講義，実習，実験を通じて，専門的な知識と技術を習得できるよう内容を構成している。また家庭科教育担当教員は２名で，８科目を担当している。

表１　人間生活系コースにおける教員養成の流れ

学年	セメスター	教育実習関係科目	教職に関する科目	教科に関する科目（被服学）	教科又は教職に関する科目	教科に関する科目（家庭経営学）	教科に関する科目（食物学）	教科に関する科目（住居学）	教科に関する科目（保育学）
1年	1セメスター	中・高等学校教育実習入門							
	2セメスター		家庭科授業論Ⅰ	色彩論		●○生活経営学	フードスペシャリスト論		
2年	3セメスター	中・高等学校観察実習 介護等体験実習	●人間生活（家庭科）教育概論 ●家庭科教材構成論	●○アパレル素材学 アパレル設計学	○介護等体験事前指導	●○生活経済学	●○調理学実習Ⅰ	●○住居学 設計製図	児童保健学 生涯発達学
	4セメスター		●生涯活動教育論 家庭科教育方法・評価論	●○アパレル設計学実習Ⅰ ○アパレル管理科学	情報処理	消費生活論	●○食生活栄養学 ○食品科学 調理学実習Ⅱ	●○住居環境学	●家庭看護学
3年	5セメスター	教育実習指導B	家庭科授業論Ⅱ 人間生活（家庭科）教育演習	服飾デザイン論 アパレル設計学実習Ⅱ	道徳教育指導法	生活設計論	食品材料学 食物学実験 調理科学 食品鑑別論	住居管理学 インテリア計画 住居計画学 住居設計学実習Ⅰ	●○保育学
	6セメスター	中・高等学校教育実習	家庭科教育研究法	アパレル科学実験	人間生活教育史 家庭機械及び家庭電気	○家族関係学 家族心理学	フードコーディネート論	住居設計学実習Ⅱ	
4年	7セメスター								
	8セメスター	教職実践演習							

○印は，免許状取得のための必修科目を表す。
●はコース必修科目を表す。

３．浴衣着装授業の構想

３．１　提示した課題

浴衣の着装体験を含む授業を構想したのは，表１に示したアパレル設計学実習Ⅱ（５セメスター開講・選択科目）の受講生13名（全員女子）である。受講生は３年生と４年生で，４セメスター開講のアパレル設計学実習Ⅰ（必修）において，ブラウスの製作ならびに子ども用の浴衣（一つ身）を製作している。アパレル設計学実習Ⅱでは，自分自身の体形に適した大裁単衣長着の浴衣を製作し，着付けまでを実習により学習した。

授業構想に当たり，学生たちには以下のような指示をした。

「中学校学習指導要領では和服の基本的な着装を扱うことが家庭科学習の有効な手だてとなることが述べられているが，実際に縫った経験をふまえて学習指導案を考えてください。またその際には題材名と本時の目標をあらかじめ定めたフォーマットを用意したので，そのフォーマットを使用してください。」

図１に学習指導案のフォーマットを示した。教育実習担当者が題材名と本時の目標を提示することによって，それにふさわしい授業の視点と展開過程を構想することを課題とした。授業時間は100分とした。

なお学習指導案の構想に当たっては，当該授業の位置付けや生徒の実態，学校環境等に関する情報が必要であると考え，教育実習担当者から図２の資料も提示した。資料には附属三原中学校の中学3年間の題材配列表も添付した。

技術・家庭科学習指導案

指導者：藤井志保
対象：中学３年生
（男子 10 名,女子 10 名）
場所：被服室

【本時の学習指導】

1．題　材

和服（浴衣）を着てみよう～見て，触れて，着て，考えよう～

2．授業の視点（生徒観，教材観，指導観）

3．本時の目標

・日本の民族衣装である和服（浴衣）に触れ，和服への興味・関心を高める。
・着装を通じて，伝統的な和服の特徴やその良さを体験的に知る。
・和服をお互いに着つけ合う活動の中で，仲間とコミュニケーションをとりながら，衣服や人に関して新たな価値を発見できる。
・和服と洋服を比較する視点を投げかけて，その構成をはじめさまざまな違いについて考えることができる。

4．過程（全１００分）

分	生徒の活動	教師の働きかけとねらい

準備物

参照：女物浴衣５枚，男物浴衣５枚（すべて柄違い），帯男女もの各５本までは用意できます。
これらを必ず使用する必要はありません。また，これら以外に各種ビデオなど必要なものを挙げても結構です。

図１　学習指導案のフォーマット

浴衣の着装体験の授業　指導案作成にかかわっての資料

２０１２．８．８
広島大学付属三原中学校
家庭科担当　藤井志保

三原学園は，幼・小・中一貫教育を行っており，園児・児童・生徒同士のかかわりを大切にすることを柱に，校種を超えた交流活動も盛んである。家庭科に関しては，このような学園の環境を生かし，幼児や小学生との交流活動や行事と関連させた題材を意識して開発するようにしてきた。まだ改善中ではあるが，小中５カ年間の連続したカリキュラムを作成し取り組んでいる。

衣生活に関しては，小学校で衣服のはたらきを学び，平面的な作品であるエプロンや刺繍入りの三角巾を製作し，それを実際に着用して調理実習を行っている。多くの生徒がそれを大切にし，中学校の調理実習でも着用しているという流れがある。

中学校では，８年生（中学校２年生）の終わりに，小学校で学習した手縫いの基礎基本や裁縫ミシンの技能を確認させ，さらにレベルアップさせる春休みの課題（お弁当包み）に取り組み，９年生（中学校３年生）での衣服製作に備えている。

９年生では，個性を生かした着用について学び，夏休みにはＴＰＯに応じたお気に入りの衣服についての絵で表現する課題にチャレンジ中である。

（実は今年はこの課題の内容を変えようかと思っていた。しかし，今まで毎年継続して出していた課題で，先輩たちの作品を見ており，自分たちもこの課題に取り組むのを楽しみにしていたので変えないでほしいとの声があった。）

このたびのショートパンツの製作については，布へのプリント済みのものを使用し，限られた授業時数の中で丁寧に作品を完成させることができるようにした。布の柄は自分で選択させたが，完成後全員でファッションショーを開催する予定であることを話すと，日常の着用以上に，みんなの前で披露する時のイメージや明るく元気の出る色がいいなどこの会を意識して選択しようとする姿が目立った。

生徒の和服に関する意識については，調査していないが，特に女子は夏祭りなどへ浴衣を着て出かけるようである。おそらく男子は，文化祭などでのはっぴの着用を除けば日常生活での着用経験はないと思われる。

集団としては，物事に意欲的に取り組み，お互いに分からないことは教え合うなどの姿も見られる。また，実践的体験的授業を充実させるために，本校ではクラスを半分に分け 20 名での少人数授業を行っているため，生徒同士も仲間の様子を感じながらお互いがかかわりやすいようである。20 名の生徒を男子２名女子２名　計４名で一つの班として構成し，この班を授業の単位として活用することもある。

２週間に１回しかない家庭科の時間もとても楽しみにしている生徒もいるので，日頃触れる機会の少ない和服（浴衣）の着装体験に関しても興味を持って取り組むと思われる。またショートパンツを製作中なので，洋服と和服との違いについて比較する視点を投げかけることにより，色々なことに気がつくと考えられる。

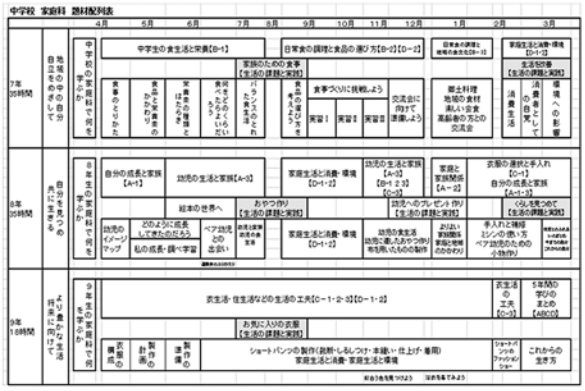

図２　提示した資料

３．２　学生による授業構想

学生13名が構想した授業内容について，教師の働きかけの部分を，浴衣の着装活動前，活動中，活動後に分け，活動内容とその活動に費やした時間を示した。表２-１，２-２にその一覧を示す。

表２－１　学生の構想した学習指導案の教師の働きかけ（その１）

	着装活動前		着装活動中		着装活動後	
	活動内容	時間（分）	活動内容	時間（分）	活動内容	時間（分）
A	ショートパンツと浴衣を提示する(型紙と完成品) ワークシートを配布する。 型紙，完成型を比較することで，ショートパンツと浴衣の違いについて考えさせる。 班内で意見交換をし終わった後，全体でも意見を共有させる。 着付けの方法について映像を見せる。	30	各班に浴衣を配り，着付けを開始する。 各班への指導を行う。	60	浴衣の正しいたたみ方も説明する。 感想を記入させる。 次時の説明	10
B	宿題として浴衣の部位名称を調べさせる。 浴衣の部位名称を確認させる 着付けの仕方を一通り理解させる(所々ワークシートに記入しながら理解させる) VTRやビデオ等で着付けの仕方を一通り理解させる(所々ポイントとなるところをワークシートに記入させる) 着付けを師範する	15	2人組になって着付けをする(1人15分) ・女子ペアー2組・男子ペアー2組 残りの男女2人をモデルとして先生が着付けを師範する	35	和服と洋服の違いについて考え，理解させる(ワークシート利用) 浴衣のたたみ方を師範する VTRやビデオで浴衣のたたみ方を一通り理解させる 先生の師範を参考にしながら自分が着た浴衣をたたませる 着替え，片づけ等を行わせる 着装体験の感想をワークシートにまとめさせる	50
C	マネキンに洋服を着せておく。(ハーフパンツ使用) 生徒に興味をもってもらうよう教師は浴衣を着て授業を始める。 あいさつをする。 和服と洋服の違いについて，自分が着ている浴衣とマネキンが着ている洋服を比較しながら実物を見て説明する。このとき生徒に簡単な質問を投げかけながら行う。 (洋服…西洋から導入された服で，立体的な形。和服…日本人が昔から着ていた服で，平面的な形。サイズにゆとりがあり，着る人の体形に合わせて着られるなど。) 和服の中から浴衣をとりあげ，今回の授業の目標を確認させる。(ワークシートを配布する) 講師の先生を紹介する。	17	男女5人に対してそれぞれ1人の指導員がついて，説明しながら一緒に着用する。 生徒はTシャツと短パンの上から着るようにさせる 着用した生徒に鏡で見たり，動いてもらって，浴衣を着るとどのように感じるか実感してもらう。 着用していない生徒には，着用した生徒を見てどのような印象を持つか考えてもらう。 着用した生徒10人を集めて写真を撮る。 (この間に浴衣の生地や柄について，着用の方法について，着てみたときの動きについて，浴衣を着た自分や周りの人の印象についてなど，意識するように声かけをする。) 同じことを繰り返して，残りの生徒にも着装してもらう。	70	ワークシートに記入させる。 可能であれば，この間に写真を現像して，生徒に配布し，ワークシートへ意見を書きやすくする。 何人かに感想を聞く。 浴衣以外の和服の種類について説明する。(武道や日本の芸能文化，特別な外出のときの和服。) 講師の先生にお礼を言うように促す。 あいさつをする	13
D	洋服と和服について製作中のハーフパンツと浴衣を比較し，相違点を考える 生徒同士がお互い着付け合うことによって，コミュニケーションを図らせる 講師の先生の紹介する 教師の着付けを見ながら着付けの仕方を習得させる 集合させる	10	前半と後半に分け，ペアになり5人ずつ着る，ペアの人が着付けを行う このとき，教師は自分の着付けを行いながら指導する 後半組の生徒は浴衣を着た状態で，着席させる マナー講座をする 歩き方，座り方，食べ方などについて指導する 美しい浴衣の着こなし方を学び，生徒の実生活に役立てるようにする たたみ方についての指導する 浴衣のたたみ方を学び，管理の仕方を知る	70	着席させる 授業を通してのまとめ 着付けのポイントの確認をする 生徒が覚えておいて知識を活かせるように，着つけのポイントを簡潔に述べる 浴衣を演出する小物について(帯，履物，扇子など) 小物使いによって浴衣をコーディネートして楽しんでほしいことを伝える 講師の先生からコメント	20
E	和服，洋服にはそれぞれどのようなものがあるのか，挙げさせる 平面，立体構成について学習するときは，型紙や裁断図を見せる 浴衣はどのような時に着るか考えさせる 浴衣は帯で調節できることを伝える 各部の名称についての説明は，実物を見せながら説明する 男女で着方に違いがあることや前見頃は左が前になるように着ることを説明する	30	着つけの手順をやりながら説明する つまずいている生徒たちには，アドバイスしたり，近くの生徒と協力させたりする	55	浴衣のたたみ方を説明する 授業の最初に学習した和服と洋服の特徴を復習させる	15
F	各班浴衣を着装する人を班で男女1人ずつあらかじめ選んでおき，その生徒は体操服で授業に来るように指示しておく ワークシートを配布する 黒板に和服(浴衣)を着用している写真を提示する 生徒の持つ和服についてのイメージについて問いかけ，自由に発言させる(発言がない場合はランダムに当てる，なるべくたくさんの意見を引き出すよう発問を工夫する) 今までに着用したことのある生徒がいるか聞き，着用したことのある生徒にそのとき感じたことなどを発言させる 実物の浴衣を見せ，今回の授業では実際に浴衣を着用することを説明する 現代における和服の位置づけについて説明(着用場面や和服の種類，和服を着る意義など) 平面構成と立体構成の違いについても説明する 使用するVTRは，男女両方の着付けを紹介しているものとする 実際に着用することをイメージして見るように指示 ポイントになるところはワークシートに記入できるようにしておく 班の代表に前に来てもらい，好きな柄の浴衣を男女それぞれ1枚ずつ取るように指示(決まらないようならじゃんけんなどで決めさせる) 浴衣を班で自由に見て触ってみるよう促す	50	班で協力して着付けをさせる 女子の方が着付けが難しいので，男→女の順で行う まずある程度教師が黒板で説明して，着付けをさせ，全体ができたら次に進む，という風に足並みを揃えるようにする 黒板の説明はVTRを見てまとめたワークシートと対応させておく 分かりにくいところは教師が1人の生徒に注目させて実演するなどする 主に教師は机間巡視をしながら生徒の様子を観察する 着付けができたらすぐには脱がずに歩いてみるなどするように指示	35	着付けが上手くできたことを褒める 実際に着付けをしてみて感じたことを発表させる 浴衣を着てみた生徒には，着てみた感想を聞く 発表内容は黒板に記す 浴衣を脱ぎ，時間に余裕があるようならたたませる(たたみ方はワークシートに図で示しておく) 今後機会があれば積極的に浴衣を着てみるよう勧める 今回の授業で感じた和服のよさを忘れないように言う	15

表２-２　学生の構想した学習指導案の教師の働きかけ（その２）

G	和服と洋服にはどんな違いがあるか，知っている知識をもとに挙手させ，違いを述べさせる 浴衣を観察させ，気付いた部分があればメモさせる どこに違いがあるか投げかける，たたみ方，縫い方など ビデオを見せる	35	2人ペアになり，お互いに浴衣を着せあう 帯は，時間があれば，自分で作り，時間がなさそうなら，つくり帯を使う	45	たたんだり，片づけをする 気づきなどをワークシートに記入し，気づきを発表する	20
H	浴衣に対するイメージをワークシートに記入させる 着付けの仕方のビデオを見せる 着付けをするペア（男女別2人組）を決めさせる 浴衣を決めさせる	38	着付けの指導 立体構成，平面構成の特徴を学ばせる たたみ方の指導	30	着装後の感想を記入させる 洋服（シャツ，ハーフパンツ）と和服（浴衣）のパーツを比較させる	32
I	ワークシートを配布し，伝統服を着た人の写真と国を結び合わせ，世界の伝統服を認識させ，そのうちの日本に注目させる。 生徒に世界にとって浴衣が日本の伝統服であることを教えて，生徒に世界の伝統服と比較することで，他の伝統服との違いを考えさせ，浴衣の特徴を考えさせる。 浴衣の着付けビデオを見ながら着付けの仕方を学ばせる。 理解しづらいと考えられるところは教師がビデオをとめながら師範する。	40	男女それぞれ同性同士2人１組になって着付けを実践する。着てない方の生徒は，着付けている生徒の補助をする。教師はできるだけ介入しないようにする。	50	着付けの態度・意欲を評価させる。写真を撮って，ワークシートに反省を記入させる。何人かの生徒に感想を発表させる。	10
J	日本の行事・文化と和服を結び付けて考えさ，日本の伝統衣装である和服について興味を持たせる。 和服が平面構成であることを確認させる。 実物の反物を見せて和服がどのような布から，どのように裁断されて作られているのかを示す。また，制服などの生徒がもっている衣服を例に洋服についても触れ，和服と洋服の違いに気づかせる。 TPOに合わせた着物について説明する。 浴衣を見せて実物を示しながら説明する。 着付けをする時に必要な和服の名称を取り上げることで，後での着付けの説明を理解させやすくする。 和服と洋服の着方の違いに気づかせる。 後でスムーズに着付けできるように，着付けのポイントをワークシートにまとめさせる。	45	浴衣を着て歩いたりして和服の特徴を体験的に知るようにする。	25	構成を始めとして着心地や機能性などさまざまな違いについて，和服と洋服を比較させる。 良いところを元に，悪いところも考えさせる。 本時の学習内容を思い出させ，自分の言葉で書かせることにより理解を深める。 みんなの意見を共有できるようにする。 本時の授業内容の確認をする。	30
K	本時の目標と流れを提示し，目標を認識させ，見通しを持って授業に臨めるようにする。 女物と男物の浴衣を全体に見せ，浴衣の形や構造を認識させる。（浴衣の構造が描かれたプリントを配布） 着付けのDVDを見せる。（次に自分たちで実際に着ることを意識させる） 着付けの手順を簡単に示したイラスト付きのプリントを配布する	20	手本を見せながら，生徒と一緒に浴衣を着る。 DVDは生徒が自由に見られるように流しておく。	70	座る，座る，手や足を上げる，歩くなどの動作をさせ，着たときの浴衣の特徴や，洋服との違いを体感させる。 全体を回りながら指導する。 脱いだら浴衣をたたんで，次の人に交代する。 ワークシートを記入させる 動作をしてみて気づいたことを書かせる 着方や着心地，構造など浴衣を着てみて気づいた洋服と和服の違いにふれる 浴衣を着てみた感想を書かせる	10
L	和服のイメージや着用経験について生徒に質問する 着付けのビデオを見せる 分かりにくいところは詳しく解説する 和服(男物浴衣・女物浴衣)とブラウスの計3枚を各班に配 浴衣とブラウスを見比べ，見た目からの違いを探す	45	帯などを配り，着付けを始めさせる 各班で男子2人，女子2人のペアになり，着付けを始める 1人が着つけられたら交代し，次の人が着付ける。 着付けの手順が書かれた掲示物を前に掲示しておく 各班を回りながら正しく着付けられているか見て，アドバイスする	40	着てみた印象や着用して感じた和服の特徴・洋服との違いについてワークシートにまとめさせる 和服と洋服の違いについてまとめる ワークシートの提出を指示する	15
M	知っている和服の種類を発表させる 発言しやすい雰囲気作りを心掛ける 浴衣を見せ，着たことがある人？と手を挙げさせる その中から数名にその時の印象や感じたことを聞く 着装経験がある人もない人もその印象を共有することができるようにする 浴衣の着装方法を指導するビデオの中で，分からない単語があればワークシートに書き出すよう指示する ある程度和服の構成における基本的な単語の意味を知る必要があるが，ただ単語のみをこちらが提示しても興味を引かないので視覚教材を利用することで関心を持たせる 〈机間指導〉をする 分からなかった単語をグループ内で話し合わせる 男女間での知識の差などが分かる，また帯や襟など簡単なものに関してはグループ内で教えあいをさせ解決し，発表の際の時間短縮につなげる 〈机間指導〉をする グループごとに発表させる 特に分からないという意見が多かった単語を4つ(数が多い場合は8つ)に絞り，班ごとに単語一つを割り当て用意しておいた書物で調べさせる。【衽，身八つ口，おはしょり，えもん等】 〈机間指導〉をする 班ごとに前に出て浴衣を用いて調べた単語がさす場所や意味をクラスに説明させる 一班ごとに質問タイムを設け，必要であれば補足も入れる 自分たちで調べ，それを他のグループに教えるという過程を踏むことで理解が深まり，また生徒同士ということで質問や意見なども出やすいと考えられる 生徒を男女2人代表で前に出てきてもらい，他の生徒はその周りに集める。もう一度ビデオをながし，適宜止めながら浴衣を実際に着せる ビデオでは映っていない部分や，伝わりづらいところをゆっくり生徒に教えられる	60	班に分かれてそれぞれ着付けをさせる ビデオを繰り返し流しておき，それに加えイラストの入った着付けのプリントも配布する クラス全体で着付けを同時進行にすると班ごとに差が生じ待たなければならない班が出るため，バラバラに活動させる。そのためビデオのほかにプリントを用意しいつでも確認ができるようにする 〈机間指導〉をする 着付けが終わった班からまだの班を手伝わせる	35	男女合わせて10人が浴衣を着た状態で，授業を再開する 浴衣を着たまま普段の行動をとることによって，様々な気づきを見つけさせる 浴衣を着て，あるいは着せてみて感じたことや印象などをグループで話し合わせ，ワークシートに記入させる 〈机間指導〉をする 発表させ，その意見をもとに洋服と和服を比較すさせる 例えば動きにくいという意見が出たら，全員立たせ屈伸させるなどして体操服と浴衣での違いをじかに感じさせる 浴衣を脱がせる まだ来ていない生徒に浴衣を着たいか発問する 和服に対する関心が高まっているということをその発問を通して感じさせ，日本の伝統的な和服の魅力を再確認する まだ浴衣を着ていなかった生徒に浴衣を着させる 何度も着装を繰り返すことでより知識が定着させる また時間を計っておいてさっきは15分かかったから次は10分でなど目標を立てる 〈机間指導〉をする 振り返りシートを記入させる 浴衣を脱がせる	5

４．授業構想に対する評価と考察

４．１　家庭科教育学担当者による評価と考察

学生に提示した題材ならびに本時の目標（図１）は以下のとおりである。

【題材】和服（浴衣）を着てみよう～見て，触れて，着て，考えよう～

【本時の目標】

① 日本の民族衣装である和服（浴衣）に触れ，和服への興味・関心を高める。（関心・意欲・態度）

② 着装を通じて，伝統的な和服の特徴やその良さを体験的に知る。（知識・理解）

③ 和服をお互いに着つけ合う活動の中で，仲間とコミュニケーションをとりながら，衣服や人に関して新たな価値を発見できる。（工夫・創造）

④ 和服と洋服を比較する視点を投げかけて，その構成をはじめさまざまな違いについて考えることができる。（工夫・創造）

表２-１ならびに２-２を参考に,「家庭科授業論Ⅰ」,「家庭科教材構成論」,「家庭科方法・評価論」,「家庭科教育演習」等，家庭科教育学の方法論関係の講義・演習を担当する立場から，本時の４つの目標に照らして，表３-１に示した視点で評価した。また，授業構想における基礎的・基本的な要点として教育実習までに上記の講義の中で学生達に強調してきた２視点を加えた。

これらの視点に基づいて，学習指導案を評価した結果を表３-２に示す。目標①は「関心・意欲・態度」の観点に関わる目標であるが，多くの学習指導案に導入の工夫はみられるものの，それによって一人ひとりの興味・関心を引き出し授業で学んだことによってそれらがどのように変容したのかという学習の成果を確実に振り返る場面を設けているのは５件と少なかった。目標②は「知識・理解」の観点に関わる目標であり，着装体験や浴衣と関わることによって実感的な理解をねらいとしている。そのためには体験と思考を結ぶ工夫が必要である。このことは講義で最も強調してきた点であるが，思考の場面を設けてはいるものの，体験と思考が相互に効果的に結びつくような適切な工夫ができているのは４件であった。目標③と④は「工夫・創造」の観点に関わる目標である。友だちとの協力やコミュニケーションは着付けをともに行うことで必然的に生じるものであり，ここで期待するのは知的な気付きや認識の深まりや広がりを促す他者からの刺激を得て，それらを共有できるような場面を意図的に設定しているかどうかである。そのような効果を生む工夫がみられたのは３件であった。

表３-１　学習指導案の評価の視点（家庭科教育学担当者）

目標①	導入で和服に関する生徒一人ひとりの興味・関心を引き出し，本時の学習や体験や友だちからの情報に基づいて，まとめで再度自分の関心や認識を振り返らせる工夫や場面があるか。
目標②	着装体験を通して（活かして），和服の特徴やよさをみつめさせたり考えさせたりする工夫がみられるか。（体験と思考を結ぶ工夫がみられるか。）
目標③	友だちとの会話やコミュニケーションなどを通して，和服についての学びを深めたり広げたりする場面を設けているか。
目標④	和服と洋服の違いについて認識を深めたり，自分の生活に活かす工夫を考えたりできる問い（視点）を投げかける場面を設けているか。
加えた視点①	授業の視点，特に教材観が適切に表現できているか。
加えた視点②	100分の授業の中で教師が意図した活動を適切な時間配分で行えるように構想しているか。

表３-２　浴衣着装授業の学習指導案の目標に対する視点の評価（家庭科教育学担当者）

評価の視点	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
目標①	導入の工夫はみられるが生徒の興味・関心を引き出す記述はなく，まとめでも感想を書かせるに終わっている	導入の工夫はみられず，まとめでも感想を書かせるに終わっている	導入の工夫があり生徒の興味・関心を引き出しており，まとめでも自分の認識を振り返らせる具体的な工夫がみえる	導入の工夫はみられず，まとめての学習の振り返りもみられない	導入の工夫や生徒の興味・関心を引き出す記述も少しみられるが，まとめでは具体的な振り返りの工夫がみられない	導入の工夫や生徒の興味・関心を引き出す記述も少しみられ，まとめでも振り返りを共有するなどの工夫がみられる	導入の工夫や生徒の興味・関心を引き出す記述も少しみられ，まとめでも振り返りを共有するなどの工夫がみられる	導入の工夫はみられないが，浴衣に対するイメージを引き出してはおり，着装前後で比較させている	導入の工夫はみられるが生徒の興味・関心を引き出す記述はなく，まとめでも反省を書かせ共有するに終わっている	導入の工夫があり生徒の興味・関心を充分に引き出しており，まとめでも自分の認識を振り返らせる具体的な工夫がみえる	導入の工夫はみられるが生徒の興味・関心を引き出す記述はなく，まとめでも振り返りの具体的内容はみえるが共有はない	導入の工夫はみられるが生徒の興味・関心を引き出す記述はなく，まとめでも振り返りの具体的内容はみえるが共有はない	導入の工夫があり生徒の興味・関心を引き出しており，まとめでも自分の認識を振り返らせているが具体的内容がみえない
目標②	着装体験前に構成を学び，体験後に体験をふまえて再度思考させているようであるが，記述が明確ではない	着装体験後に体験をふまえて思考させているようであるが記述が明確ではない	着装体験中の思考の深め方に工夫がみられる	体験と思考を結ぶ工夫はみられない	体験と思考を結ぶ工夫はみられない	着装体験中に少し思考させているが工夫はみられない	着装体験中と後に少し思考させているが工夫はみられない	着装体験後に体験をふまえて思考させているようであるが記述はない	体験と思考を結ぶ工夫はみられない	着装体験の前中後で段階的に体験と思考を結ぶ工夫がみられる	着装体験後に動作をしてみることで和服の特徴等を実感的に理解させている	着装体験後に動作をしてみることで和服の特徴等を実感的に理解させている	着装体験前の学習での思考が体験とつながっているか？後に動作をしてみることで和服の特徴等を実感的に理解させている
目標③	着装前に班で意見交換させたり，班で協力して着付けをさせたりしているが，まとめでの共有による学びに深まりはみられない	コミュニケーションは着付けでの協力のみである	着装体験中のコミュニケーションや後の意見共有など多様な関わりによって学びを深める工夫がみられる	コミュニケーションは着付けとマナーやたたみ方の学習での協力のみである	コミュニケーションは着付けでの協力のみである	コミュニケーションは着付けでの協力とまとめの発表場面にみられる	コミュニケーションは着付けでの協力とまとめの発表場面にみられる	コミュニケーションは着付けでの協力のみである	コミュニケーションは着付けでの協力とまとめの発表場面にみられる	着付け協力の他，体験後の思考を深める班活動，留学生への和服アピールの発表の意見共有等多様な関わりから学びを深める工夫がみられる	コミュニケーションは着付けでの協力のみである	コミュニケーションは着付けでの協力のみである	着装前に班で思考させたり，班で協力して着付けをさせたり，着装後の話し合いで意見交換したりして学びを深めている
目標④	着装体験前にショートパンツと浴衣の違いについて型紙も用いて考えさせているが，視点が明確ではない	着装体験後に和服と洋服の違いについて考えさせる場面を設けているが，視点が明確ではない	体験前に製作中のパンツと教師着用の浴衣の違いを考えさせ，体験後には浴衣以外の和服にも興味をもたせる工夫がある	体験前に製作中のパンツと浴衣の違いを考えさせ，マナーや和装小物にも触れているが，主体的に考えさせる工夫はない	着装体験前に平面構成，立体構成について型紙や裁断図を用いて考えさせているが，主体的に考えさせる工夫はない	着装体験前に平面構成，立体構成について説明しているが，主体的に考えさせる工夫はみられない。歩いてみさせることで和服の特徴を考えさせている	体験前に和服と洋服の違いを考えさせる場面を設け，たたむ体験から，主体的に考えさせる工夫がみられる	着装体験後に和服と洋服の違いについて考えさせる場面を設けているが，視点が明確ではない	世界の伝統服の中で和服に注目させ考えさせている	行事・文化と和服を結びつける，日常の洋服との違い，TPOに合わせた和服，動作適応の確認，海外にアピールする和服等多様な視点から主体的に考えさせる工夫がある	男物，女物の形や構造，動作適応性の視点から和服を考えさせている	男物，女物の浴衣とブラウスの構造の違いから和服を考えさせている	体験前に和服にかかわる単語に注目させている。また体験後に，動作をさせて和服の特徴を考えさせている
加えた視点①	和服がもつ教材的意義に触れているが，それらを学ぶ意義についての表現が不足している	和服がもつ教材的意義についての自分なりの表現がみられない	和服がもつ教材的意義に触れているが，それらを学ぶ意義についての表現が適切でない	和服がもつ教材的意義に触れているが，それらを学ぶ意義についての表現が適切でない	和服がもつ教材的意義に触れているが，それらを学ぶ意義についての表現が不足している	和服がもつ教材的意義に触れておらず，それらを学ぶ意義についての表現が不足している	和服がもつ教材的意義についての自分なりの表現がみられない	和服がもつ教材的意義に触れており，それらを学ぶ意義についての表現も適切である	和服がもつ教材的意義に触れているが，それらを学ぶ意義についての表現が適切でない	和服がもつ教材的意義に触れており，それらを学ぶ意義についての表現も適切である	和服がもつ教材的意義に触れており，それらを学ぶ意義についての表現も適切である	和服がもつ教材的意義についての表現が不足しているが，それらを学ぶ意義についての表現は適切である	和服がもつ教材的意義についての記述がなく，それらを学ぶ意義についての表現が適切でない
加えた視点②	着装体験後の時間が不足？	着装体験の時間が不足？	着装体験後の時間が不足？	着装体験前の時間が不足？	着装体験後の時間が不足？	着装体験後の時間が不足？	適切な時間配分である	着装体験の時間が不足？	着装体験後の時間が不足？	着装体験の時間が不足？	着装体験後の時間が不足？	適切な時間配分である	着装体験後の時間が不足？

さらに思考を揺さぶる問いかけや視点の投げかけの構想は難しく，その工夫の一旦はみられたものの効果的に提示されたのは２件であった。教材観の書きぶりの不適切さや要点の不足は，当該教材の和服や衣服文化への認識が浅いばかりではなく，適切で適確な表現の理解が不十分であることが要因として考えられる。授業の時間配分も現実的には難しいと思われるものが多かった。それぞれの構想した学習指導案には工夫の一旦はみられるものの，授業目標達成のためには多くの課題がみられた。

以上のような学習指導案の評価をふまえて，担当授業の今後の課題について以下の通り考察した。大学入学後，学生達は大学の講義における家庭科教育関連の学習と平行して,「教育実習入門」「教育実習観察」「介護実習」「事前実習」といった実習の中で附属学校の家庭科教諭の授業や先輩達の授業を観察するとともに，学校環境や生徒達の様子を観察している。しかしながら，教育実習前に，生徒の興味・関心を授業に適切に反映させることには限界がある。従って，大学の指導においては，まず教材観を深める手だてを学ぶことを優先すべきである。それが授業の目標を明確に立てることにつながるであろう。多様な学習内容や教材を扱う家庭科の授業を学生の興味に応じて作らせるよりも，ひとつの教材をじっくりと検討，解釈させることによって，授業構想の要点を把握させることが必要であると思われる。また，教科内容学の担当者との連携の中で，生活に関わる知識・技能の習得ばかりでなく，生活者としての課題意識をもたせる指導の重要性を強調したいと考える。さらに教育実習担当者の指導観や学習観を知り，共有したり，差異を活かした指導を行う必要性を認めた。

４．２　教科内容学（被服学）担当者による評価と考察

家庭科教育学担当者と同様に，大学において教科内容学（被服学）の担当教員として，表４－１に示した視点で学習指導案を評価した。また目標①～④ごとの展開ができているかに加え，展開が可能な評価の視点を３点加えた。

これらの視点に基づいて，学習指導案を評価した結果を表４－２に示す。教材観が明確にとらえられていないことが，それぞれの目標に応じた授業展開ができないことに結びついていた。加えた視点については，いずれも13名の学生の中で言及している学生はいなかった。加えた視点の内容については，意欲的に取り組む学生が多かったので，実習中随時ふれるようにしていた。しかし，日常生活において和服を着装することが定着していないため，実生活との関連づけができず，そのような視点からの授業展開を考える力が養えていないことが明らかとなった。

表４－１　学習指導案の評価の視点
（教科内容学・被服学担当者）

目標①	日本の気候風土にあった平面構成の特徴を理解し，和服への興味・関心を高めるような展開ができているか。
目標②	日常生活で着装する機会が少なくなった和服の着装という授業の必要性について，教材観としてしっかりととらえ，伝統的な和服の意義を伝えるための展開ができているか。
目標③	衣服の着装は衣服とそれらを着る人，またその着装した人と人との間に生じる「反応」と「刺激」によって，高め合うことができるノンバーバルコミュニケーションである。すなわち人は人の着装状態を見て刺激を受け，またその刺激によって自らの着装を振り返るという反応が起こる。普段と違う仲間の姿を見ることで評価し合い，新しい価値を見いだす展開ができているか。
目標④	裁断，縫製，着付け，保管・収納のそれぞれの工程において，和服と洋服のどこに違いがあるのかを考える展開ができているか。またそれらの違いが各工程のどの点に意義があるのかを考えさせられているか。
加えた視点①	縫い解いて仕立て直しが可能であるため，持続可能な衣生活に適していること。
加えた視点②	反物という洋服とは違う素材からできている和服にも言及できているか。
加えた視点③	収納スペースの視点から住生活との関連を考える視点を持つこと。

表４－２　浴衣着装授業の学習指導案の目標に対する視点の評価（教科内容学・被服学担当者）

評価の視点	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
目標①		和服を着て生活体験をさせる	マネキンにハーフパンツを着用させて見せる			現代における和服の位置づけを説明する		浴衣に対するイメージを考えさせる	世界の伝統服を認識させる	日本の行事・文化と和服を結びつけて考えさせる	浴衣の形と構造を男物，女物の浴衣を見させる	和服のイメージについて発表させる	着物の用語の意味を調べさせる
目標②	夏祭りなどの行事との関連づけ		武道や日本の芸能文化などに触れる	着付け，マナーについて触れる	夏の行事などとの関連づけにふれる	和服の着用場面にふれる			日本の伝統服の特徴を比較検討する	和服の着用場面にふれる。留学生に和服の良さを伝えるアピール文を書く		和服の着用経験を発表させる	
目標③	写真を撮る		グループで写真を撮る。生地やがらについての印象を考えさせる。			着装の感想を発表させる		着装後に着装前のイメージと比較する	写真を撮る	着付けたときの感想をWSに書く		着た印象をWSに整理する	着た印象をグループで話し合う
目標④	ショートパンツとその型紙を見せる。		ハーフパンツとの違いについて説明する	ハーフパンツと違いを考えさせる	型紙，裁断図を見せる	立体構成と平面構成の違いを説明する	洋服との違いについて考えさせる	シャツ，ハーフパンツとの違いを考えさせる		和服と洋服の違いについて制服を例に気づかせる	着付けた後，洋服との違いを体感させる	ブラウスを見せて浴衣との違いを考えさせる	体操服との違いを感じさせる
加えた視点①													
加えた視点②													
加えた視点③													

以上の結果から，担当授業の今後の課題を考察する。実習における浴衣の製作段階では，本時の目標を達成できるような授業内容を展開していた。しかし学生たちは製作を作業としてこなしていくことに集中しており，学習指導案への展開に生かせる思考を行えていない。このことから，できれば15回の授業の中で，学習指導案への展開に生かせる視点を確認する授業を入れられるよう授業計画を検討する必要があると考えられる。

４．３　教育実習担当者による評価と考察

教育実践指導としての立場から，教育実習担当者である附属学校教員により授業構想の評価と考察を行った。

本時の目標に照らし合わせて，表５−１に示した７つの視点で評価した。本時の目標①〜④の中では，目標③の「仲間とのコミュニケーション」や「新たな価値の発見」を達成するのが難しく，特に「新たな価値」についてはその評価も難しいと思われる。しかし家庭科の授業においては，他者とのかかわりの中で自分一人では気がつかなかったことに気がついたり，一人ひとり異なる生活知を交流させることで，新たな生活知を身につけていく活動を大切にしていくべきであると考えている。そのような視点をどのように学習指導案の中に取り入れたかに注目して評価した。その結果を表５−２に示す。

表５−１　学習指導案の評価の視点（教育実習担当者）

1	「何のためにこの授業を行うか」「この授業がどうして必要か」という意味づけについて考え、それを教材観（題材設定の理由）に書くことができているか。
2	授業の目標を生徒たちに分かりやすく示すことができているか。
3	最後のまとめで、本時の目標に対しての評価や振り返りが生徒も教師もできるようになっているか。
4	他者と意見交流をしながら、様々な角度から和服について考える場面の設定があるか。（他者と意見交流することで一人では気づけないことに気づく。）
5	新たな価値を発見するきっかけとなるような場面の設定や発問はあるか。 あるいは、その確認をしたり交流する場面はあるか。 ①和服に関して②仲間に関してと両方あるが、ここでは主に②に関して
6	和服は世界に誇ることのできる日本の伝統的な衣文化であることを,改めて認識させて、和服の良さを実感させる手立てがあるか。
7	着付けをしている場面で、ただ着るだけでなく、考える視点を示すことができているか。

表５−２　浴衣着装授業の学習指導案の目標に対する視点の評価（教育実習担当者）

評価の視点	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
1	崩れた和の取り入れ方？着付けやマナー身につけて？	中学校学習指導案？学習指導要領に示されているからではなく考えが必要	教材観ではなく生徒観になってしまっている	浴衣の着付けやマナーを身につけるとある？	教材観が書けていない	和服を着る貴重な経験にとどまっている	教材観が書けていない	伝統にも触れて書けている。国際社会という視点もある。	伝統の伝承という視点がある。目的の一つ？	わかりやすく書けている	文章が長いが大切なことが押さえて書けている	ほぼ書けている	生徒観になっており教材観が不十分
2	流れに本時の目標確認や課題設定がない	流れに本時の目標確認や課題設定がない	導入で生徒の意欲を喚起させ、目標確認もしっかりできている。最後に、自分の写真を見ながらまとめられる工夫もありすばらしい	流れに本時の目標確認や課題設定がない	流れに本時の目標確認や課題設定がない	流れに本時の目標確認や課題設定がない	流れに本時の目標確認や課題設定がない	はじめに提示している。提示の内容は分からない	流れに本時の目標確認や課題設定がない。しかし導入は意欲を喚起させる内容である	流れに本時の目標確認や課題設定がない。しかし導入は意欲を喚起させる内容である	目標と授業の流れの確認がある	流れに本時の目標確認や課題設定がない。導入は意欲を喚起させ工夫してある。	流れに本時の目標確認や課題設定がない
3	着付けのポイントや小物など方向性が違う	感想を書いた後交流があると良い	教師の働きかけがよくわかり,工夫もある。最後に意見を交流する場面もある	まとめの内容が適切でない	学習内容を実感できたか振り返らせている。交流があるといい	目標設定は明確に書けていないが、まとめは発言し交流し書き、丁寧なまとめとなっている	具体は分からないが多くの視点を投げかけている。交流もある	まとめがない	評価の視点はあるが、目標に対しての部分はない	和服の良さを留学生に伝えるアピール文を考えるとい実践的なまとめですばらしい	まとめの部分の教師の働きかけを書くべき。視点は示してあるので、クラスで交流して共有するといい	先生の話を聞くところでとどまっている	まとめの内容が指導案上ではよく分からない
4	不十分	指導案上では分からない	お互いに交流できるような働きかけがある	指導案上では分からない	指導案上では分からない	指導案上では分からない	指導案上では分からない	指導案上では分からない	指導案上では分からない	班で話し合いさらにクラスで交流している	着付けの場面で教えあうとあるが、教師の働きかけがない	指導案上では分からない	班で話し合う設定がある
5	着付けと実生活での動作の場面	WSに記入後交流があるのかどうか指導案上では分からない	他の生徒をみて印象を考えさせている	指導案上では分からない	指導案上では分からない	イメージを問いかけたり、柄を選ばせているのでその視点で周囲の仲間を観察するかも？	指導案上では分からない	着装前の自分のイメージとの比較の時間がある。	指導案上では分からない	指導案上では分からない。しかし、指導観には含まれている	指導案上では分からない	指導案上では分からない。着てみた印象を書くようになっているが自分か他者か分からない	印象を班で話し合わせる
6	美しい浴衣の着こなし方でそれを感じられる	休憩時間の和服の生活体験	浴衣以外の和服について伝えている。（最後に）	着こなし方の指導はあるが伝統を装うという視点がない。マナー学習にとどまっている	導入で教師が説明するのか？	和服についての知識を学ばせている。丁寧な振り返りの中で実感させる	指導案上では分からない	題材観には書いてあるが指導案上では分からない	導入がとても良い。世界の中の日本という視点から考えさせている	日本の行事と和服を結びつけて導入で興味関心を引くようにしている。留学生に伝えるという設定がある	題材観へ記入されている割には展開の中にその設定がない	伝統という視点が弱い	生徒に浴衣について発問して教師が確認している
7	着付けの講師の先生も来られるが、着付け着こなし方のみで少々不十分	和服と洋服の違いの交流が着付け後あるが、着付けの時点でその視点がしめされているかどうか指導案上では分からない	生地・柄・着用方法・動き・着たときの印象・着たときの気持ちなどを示す	前時にDVDも視聴。効率よく着付け。着付けることに重点が置かれている	指導案上では分からない	着付けた後歩くよう指示している。動きという視点がある	洋服との比較の視点を投げかけている	指導案上では分からない	教師の介入はゼロは問題解決能力育成？ゼロなら最後に何が課題でどう解決したか未解決はどこかなど疑問点や分かったことの交流の時間を丁寧にする必要がある。直しが必要なグループもあるかも	動作については視点として示してある。着装後話し合うので、着付けの時にもその視点を示すのかもしれない？	洋服との違いや動作の時など視点は示してある。しかし「体感させる」にとどまっている。例:そのために、○個の視点を板書するというように手立てを書けるといい	なるべく一人で着るとある	着用した状態で班で話し合うので動作などしてみることができる
その他				パンツとの比較が導入にあるのに最後が小物の使い方に終わってしまっている					浴衣が他の伝統服と何が違うのか考えるとあるが、何が違うと導きたいのか大変気になる。 問題解決能力？	題材観・生徒観・指導観に自分の考えを入れて書けており、その授業でめざす生徒像がわかりやすい。また、単なる衣服の着装に終わらず伝統を装うという点やさらに、国際社会の中での日本文化という視点もあり授業構成がしっかりしている		浴衣とブラウスの比較の後にビデオを見せるとよい。一人で着ることより、協力して着て着心地や動作、着方、柄など和服の特徴や良さを実感させる方へ力を注ぐ方がいい	単語の意味を調べる時間があるが、その活動に時間をかけていると後半が時間不足になる

教材観が明確に適切に書けている学生は，授業目標を生徒へ適確に提示し，最後のまとめも丁寧にできていた。教材観が不十分である学生は，授業展開において目標を達成できない傾向にあった。このことから授業の視点については，まず教材観を明確にしたうえで，教材観→生徒観→指導観という流れで書くことが望まれる。

浴衣着装という実践的・体験的な授業を構想する中で，製作中のショートパンツやブラウスなどと和服を比較させたり，反物などの実物を用意したり，ビデオを視聴させたり，着付けの講師を招いたり，たたみ方に触れたり，あるいは教師自身が浴衣を着て授業をするなど，多様な工夫がみられた。

一方，この題材の授業を「着付け教室」のようにとらえている学生も多くみられた。そのため，全体的に「洋服との違い」「着用方法」「着心地」「動作」生地や柄」「帯について」「見た目」「着たときの印象」「布の形や構成」などの視点をしっかりと伝えて，着装に取り組ませる展開をしている学生は少なかった。

導入についても，マネキンに洋服を着せたり，世界の各国の伝統的な衣服を提示したり，自由に和服のイメージを発表させたり，事前に調べ学習をさせておいたりするなど工夫されたものが多かった。

洋服と和服の立体構成と平面構成の違いについては，ほぼ全員が取り入れていた。

以下，個々の学習指導案について特長を概説する。

Cの学習指導案は，生徒たちが着装に楽しく取り組めるように，身長が同じくらいの人をペアにしたり，恥ずかしがる生徒への対応も考えたりなど，細やかな配慮がなされていた。授業において，生徒たちの気持ちを考えた教師の心遣いは，生徒同士の関わりへも反映されると思われる。また着付け時の視点も提示できていた。加えて，難易度が高いと思われる目標③「和服をお互いに着付け合う活動の中で，仲間とコミュニケーションをとりながら，衣服や人に関して新たな価値を発見できる。」について，具体的な対応を示していた点は評価できる。他者の和服姿を見て，どのような印象を持つのかを問いかけたり，最後にはその時間に撮った写真を現像し生徒に配布して，他者の姿だけでなく自分の姿を自分で見ながら，振り返ることができるようにするという具体的な方法の考案はすばらしい。

さらには，幼小中一貫校である附属三原学校園の環境に合わせ，機会があれば小学生や幼児に着付けする機会を設けることが構想されていた。このように年下の子どもにかかわり，楽しい交流を通して，和服のよさを自分より幼い子どもたちに伝えることができる。すなわち学びを他者（それも異年齢の）に伝えることによって，学んだことが知識となって定着することになる。そして，それは家庭科の内容CにAを関連させたことになる。内容A～Dの関連をはかって構成することができれば，子どもたちは家庭科の内容を総合的にとらえられる。以上のことから，この発想は特筆すべきであると考えられる。

Jの学習指導案は教材観が適切に書けており，導入も工夫されていた。生徒観や指導観も自分の考えを明確に示しており，この授業でめざす生徒像が描けている。単なる和服の着装に終わらず，伝統を装うという点も入っており，授業構成が適確に表現されている。それだけではなく着装を終え，班で意見交流も取り入れた後で，「留学生に和服のよさをどう伝えるかの和服のアピール文」を考えさせたことは，高く評価できる点である。和服について外国の方にそれを伝えるにはどうしたらよいかを考え，それを自分の言葉で書いてみることは，本時の授業をどのように理解しているかを確認することにもなる。また実際に世界の中の日本文化を意識させながら，実生活に生かせる実践力を高めることにもつながる。しかし限られた授業時数の中では，このように十分な時間をとることができないのが現実である。そこで例えば，「総合的な学習の時間」などで外国の方々との交流活動を行うことができれば，家庭科で学んだ知識や技能を実体験としてその活動に取り入れるという流れを構想することができるであろう。

Hの学習指導案は，和服のイメージを授業のはじめとおわりに比較させている。そのため，生徒自身が授業の中での自分の変化を感じ取ることができる。このように新しい価値の発見を生徒自らが自己評価できる流れを構想した点は評価できる。また伝統という視点を加えていた点も評価できる。

次に教育実習担当教員として，教育実習に生かすことについて考察する。教育実習中は，学習指導案を完成させながら，授業を実習生と共に創っていくことになる。しかしこれまでは指導の時間も限られているため，教材観や指導観などの文章を練ることはできていなかった。その理由は，仮に納得のいく学習指導案が完成しても，生徒の実態に合わせて，実際に生徒の前でそれらを展開できるかという実践練習の時間確保も必要であるためである。また発問の仕方，板書の方法，視聴覚機器の導入，班員の動かし方，発表のさせ方，模造紙や掲示するものの準備など，授業スキルの向上や実践内容の準備にも膨大な時間がかかる場合が多いことも要因である。本研究において家庭科教員免許取得を目指す学生の学習指導案の評価をした結果，教材

観・生徒観・指導観を理解することの重要性について，改めて認識する機会が得られた。そしてその点が自分自身で確実に把握できていないと，授業が説得力に欠けるものになることを意識して学生に伝えていきたい。

家庭科教員として，社会の変化にも目を向けながら，実生活の中でこれを生徒に伝えたいという生きた教材の開発が大切であることを改めて感じた。

５．まとめと今後の課題

異なる指導的立場の三者によって，学生の浴衣着装授業の構想力を学習指導案から評価した。

その結果，それぞれが指導を振り返り，いくつかの課題がみえてきた。家庭科教育学担当者からは，授業構想の基本事項や学習指導案の表現の基本を教育実習までに着実に習得させることが課題であることが挙げられた。被服学担当者からは，関連の内容学の授業の中で，教材や授業構想に生かせる視点を考えさせるなど，家庭科教育学と連携した展開を意図することが課題として挙げられた。教育実習担当者からは，学習指導案の教材観の理解の重要性を伝えることと，生きた教材観をもてるような指導の必要性が示された。このように，三者が共通して教材観の深まりや表現に問題があるととらえていることが明らかになった。教材観の構築は，家庭科にかかわらず教職能を向上させていく過程で培われるものであるが，その基盤となる視点をもたせることが必要であり，そのために三者がどのように連携あるいは役割分担することが可能か追究していきたい。

以上より，教科教育学担当者と教科内容学担当者の連携ばかりではなく，教育実習担当者との情報共有によって，家庭科教員養成カリキュラムの構築及び指導の改善に重要な示唆を得られることが明らかになった。広島大学では現在４附属校で教育実習を行っている。今回は附属三原中学校の教育実習担当者による授業構想の考え方や評価の視点について，大学教員との間で共有することができた。さらに他の3附属校についても同様の情報を提示し合い共有することが必要であり，家庭科教員養成カリキュラムの検討を続けるための今後の課題でもある。

引用文献

１）深澤清治他（2012）:「教員養成モデル・コア・カリキュラム作成のための教科構成原理の研究」『広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書』第10巻，pp.155－168.

２）佐藤園，篠原陽子（2012）「教科教育・教科内容・教育実習の統合を目指す中学校教員養成家庭科カリキュラム構築の試み―教員養成の課題としての「教科教育と教科専門を架橋する教育研究領域」確立の視点から―」『日本教科教育学会誌』第35巻，第２号，pp.19－29.

３）藤井志保，村上かおり，一色玲子，谷原千代（2012）:「中学校技術・家庭 家庭分野における衣生活文化の題材開発―浴衣の着装体験による効果の検証―」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第40号，pp.147－152.